終　章　22 世紀風土フォーラムへの期待

（１）求められる住民自治

以上のように、軽井沢の 50 年後、100 年後の望ましい姿について物語風に考え、夢想し、大胆に提案してきました。

共通して貫く考え方は、美しく豊かな自然、恵まれた社会的条件そこに集う文化の香り高い人的資源をひとくくりとする第一級の風土の確認と継承という視点です。

そのための具体的な方法として、地域社会デザイン、環境デザイン、創造活動デザインを第２章で提示しましたが、これらは総合化されねばならないので、従来の自治体主導型の行政スタイルだけでは果たせないテーマです。さりとて住民がいきなり主体的にかかわって成し遂げるには課題が多いことも事実です。

一方、道路整備や河川改修、上下水道の整備などのいわゆる社会的インフラについては、長期間に亘って多大な投資を積み重ね、一定の成果を得ていますが、このところの異常気象も手伝って、安全・安心な地域づくりへの必要性は増大する一方で、公共事業のみならず自治防災という新しい階段へのステップアップも進められています。

このように公共と民間の役割は、新しい連携と相互扶助の時代を迎えており、住民を最終的な主体に据える地方自治の進化が必要な条件になってきます。

（２）22 世紀風土フォーラムの提案

軽井沢未来構想会議は、こうした諸問題を総合的に解決するため「22 世紀風土フォーラム」の創設を提案します。

このフォーラムは、中央政府からの委任事務を中心とした地方自治の固定化を乗り越えて、それぞれの風土にかなった生活の細部、心の襞（ひだ）にまで触れる住民自治の望ましい姿を探る実践の場です。

近い将来予想される人口減少、財政縮小時代の都市経営のあり方を模索するとともに、スポーツや農業などの新しい分野にも着目する名実ともに全国に先駆ける「高原保養都市」の実現を目指す“設計工房”であります。

見方を変えれば“熱血・まちづくり道場”でもあり、“風土と文化の研究室”、“風土自治の苗床または司令塔”といっても良いでしょう。

優れた風土を自らの手で磨き上げるための住民意志、別荘住民の地域協力、行政サイドの意識革命が原動力となって創設される「22 世紀風土フォーラム」への期待は、サロン的な柔らかい雰囲気の中で、交流の味と風土の温もりを感じながら学習し、研究し行動する地域創成の主役になってほしいものです。